

文の適切性判断のための一試案

— 後続文完成問題における日本人との比較 —

酒井たか子

要 旨

複文の前半を与えてそれに続く文を産出させる調査を外国人学習者と日本人に対して行ったところ、外国人学習者の産出した文の中には、表面的には明らかな誤りではないが、日本人の回答にはほとんど表れないものが種々見られた。一方、日本人の場合は、課題により語彙、文型、機能の側面において非常に高い一致度が見られた。そこで、典型的な日本人の回答をその場における「適切な文」とみなし、それを基準として、外国人学習者の産出した文に対して、課題文の捉え方の違い、連想・発想の違い、教育の問題の3つの観点から検討を行った。

[キーワード] 外国人日本語学習者 適切性 後続文作成

A Study of Judgement of Sentence Appropriateness: a comparison of Japanese learners of Japanese as a second language and Japanese native speakers in completing sentences

Sakai, Takako

An examination of sentence production by Japanese learners and Japanese native speakers showed that the former produce many sentences which are not clear mistakes but are rarely produced by Japanese native speakers. On the other hand, these sentences are highly consistent with Japanese natives speakers' production in vocabulary, sentence structure, and function.

Under the assumption that typical native speakers' productions are "appropriate", I examined the differences between Japanese learners and native speakers in the following three areas.

- ① difference in perception of the sentences
- ② difference in association or ideas
- ③ influences of Japanese language education

1. はじめに

外国人学習者の作文を添削していると、間違いとは言い切れないものの日本人の作文にはおよそ表れないものや、非常に特殊な状況の下でのみ表れるようなものに出会うことが多い。例えば、以下のように文を途中まで聞いた場合、それに続くものとしてどのような語句を頭に思い浮かべるだろうか。

- (1) 田中さんが来たら・・・
- (2) 病気がはやくなおるように・・・
- (3) 大学で勉強するには・・・

普通、日本人の場合は、(1) '(2)' (3)' のような文は、まずは考えないであろう。

- (1) '田中さんが来たら、喜びました。
- (2) '病気がはやくなおるように、努力します。
- (3) '大学で勉強するには、大変ですね。

これらは文法の規則から大きく逸脱しているわけではないが、内容や形式的な面で不自然さが感じられる。

これまでの誤答分析の研究は、1970年以降、音韻レベル、形態素レベル、統語レベルから誤答を扱った研究が多く、第二言語習得や第二言語教育の面で大きく貢献をしてきている。しかし、上記のような回答に対しては、誤答の範疇に入れないことが多く、誤答分析の研究対象にはなりにくかった。最近になって、小篠ら先行研究者によって次のような見解が出されている。「学習者言語を文法規則への整合性 (conformity) のみから判断することを前提とした分析法から、近年のコミュニケーション重視の傾向を背景として、誤りの理解可能性 (comprehensibility) を原語話者の回答から得た判断基準をもとに、誤答評価の方法が検討されてきている。」小篠 (1987, p23)。このような方法論の見直しだけでなく、内容面においても、機能、概念からの誤用といった方向に関心が向きはじめたと言える。

本研究では、外国人学習者の産出した文を、適切さという面から検討を行う。「適切さ」という用語は、社会言語的能力の一つとして、例えばスピーチレベルの「適切さ」というように使われたり、「正確さ」に相對するものとして使われたりするが、ここでは広義に、使われる状況、内容、形式などさまざまな条件が満たされていることと捉えることにする。しかし、どのような条件が満たされれば適切であるか明らかにすることは現実には不可能であるので、ここでは日本人が実際に産出した文を「適切な文」とみなし、それを基準として外国人学習者の文との比較、検討を行うことにする。

寺村 (1987) は、日本人の native speaker の文法的予測力について調査したところ、「驚くほどの正確さで、しかもかなり先まで現れそうな語 (の連なり) を予知するものだ」と述べている。例えば、「その先生は私に・・・」と聞いた時点で、述語は動詞、それも「言ウ」類または「クレル」類の動詞に集中し (全体の91%)、テンスも過去に絞られる (全体の95%) という結果であった。

また、同じ課題を用いて、市川（1993）が外国人学習者に調査したところでは、外国人の場合は「言語形式においてばらつきが大きく、用いられる語句、表現は日本人より限られている」し、また「述語が同一の言語形式に収束していく速度は日本人より遅い」との結果を得ている。

外国人学習者が産出する日本語が日本人のように一致せずに、ばらつきが大きくなる原因としては、以下のものが考えられよう。

- ①direct または overt な習得（語彙力、文法力など）
- ②indirect または covert な習得（日本語にふれた経験など）
- ③母語や母国の文化の影響、ものを捉える視点のちがいがい
- ④教え方の問題

適切さにおいて問題が起こる場合には上記のうちの一つが原因であるというよりは、複数の原因が絡み合っていることが多い。以下、1)課題文の捉え方 2)問題から連想、発想するもの 3)教育上の問題に分けて考えていくことにする。

2. 研究の方法

調査は、調査用紙に理由、条件、目的など複文の前半部分を書かれたものを見て、それに続く後半部分を自由に記述させる方式で行った。課題文は表1に示す。[1]～[5]は初・中級前半程度、[6]～[10]は中級後半程度の問題として作成したものである。1)

本研究で後続文を産出させる手法をとった理由は、現実の流れ、すなわち文を読みながら次を予測するという立場での回答を得ようとするためである。また、この程度の条件を与えることにより、日本人と外国人学習者の差が明確になると考えたことによる。

表1 継続文作成の課題

[1] 手紙がこないのので _____
[2] 田中さんが来たら _____
[3] 病気になると _____
[4] あしたは日曜日だから _____
[5] けさの新聞によると _____
[6] 今度の休みに京都に行くのなら _____
[7] 病気が早くなおるように _____
[8] 大学で勉強するには _____
[9] 母が料理した魚は食べるが _____
[10] 日本語は難しいといっても _____

調査対象は筑波大学の留学生センターで日本語を学ぶ外国人留学生および筑波大学の日本人学生。留学生に対しては、3回のプレースメントテストの一部として実施し、その回答の中から「無答」と「明らかな誤用」を除いたものを対象とした。なお「明らかな誤用」の基準は日本人の回答を参考にした。すなわち、日本人の回答の中に一つでも存在したものは、「明らかな誤用」とは見なさないことにした。表2に示したように、回答対象となった人数は課題によって異なっている。回答対象者の日本語のレベルも課題のレベルに合わせて異なる。母語別の人数も各課題で異なるが、ちなみに課題[1]では、中国語59人、朝鮮語26人、英語7人、タイ語5人、その他12人であった。日本人学生は、2年から4年の学生48名。また、必要に応じて「明らかな誤答」についても言及することにする。

表2 対象となった人数

課題	全回答者数	対象者 (割合)	課題	全回答者数	対象者 (割合)
[1]	147人	109人 (74%)	[6]	147人	56人 (38%)
[2]	147人	105人 (71%)	[7]	147人	58人 (39%)
[3]	147人	105人 (71%)	[8]	147人	48人 (33%)
[4]	131人	90人 (69%)	[9]	147人	33人 (22%)
[5]	131人	60人 (46%)	[10]	278人	77人 (28%)

3. 結果および考察

3. 1 課題文の捉え方

3. 1. 1 主体が明示されていない文

主体を明示していない文の場合、日本人と外国人学習者の間の主体の捉え方に大きな差が見られた。

[6] 今度の休みに京都へ行くなら・・・

だれが京都へ行くことにして文を完結させているかという面から見ると、日本人のほとんどが京都へ行くのは自分以外であることが明らかである書き方をしているのに対して、外国人学習者の場合は自分が行くと捉えている書き方が多い。

	自分が行く	自分以外が行く	不明
日本人	2 %	96 %	2 %
外国人学習者	63 %	23 %	21 %

さらに、日本人の場合は、依頼（67%）と提案（29%）の2通りの形のみしか表れなかったが、外国人習者の場合は、非常にばらつきが見られた。外国人学習者と日本人の回答の実際の例を以下にあげる。

- (4) おみやげをかってきてください。(日本人)
- (5) 平安神宮を見てくるといいよ。(日本人)
- (6) 新幹線で行くつもりです。(外国人学習者)
- (7) カメラを持っていきます。(外国人学習者)
- (8) おみやげをかってきてあげます。(外国人学習者)
- (9) 友だちの家についてよってみよう。(日本人)
- (10) いろいろ調べておこななくては。(日本人)
- (11) 北海道にいったほうがいいです。(外国人学習者)

(4)(5)は日本人の典型的な回答である。京都へ行く人は、(4)(5)は自分以外、(6)から(9)は自分、(10)と(11)は自分か自分以外かは分からないと考えられる。日本人のほとんどが「自分以外」と解釈し、依頼か提案に収束するこの文に関しては、(6)から(11)は適切性が低いと言ってよいだろう。

主体が明示されていない文の捉え方については、先にあげた寺村(1987)の研究においても、日本人の回答の一致度の高さについて言及している。

(12) その先生は私に国に帰ったら

(12)において、「国に帰る」主体は、可能性としては「先生」と「私」のどちらでもいいはずだが、全ての日本人は「私」が国に帰ると解釈しており、またそれに続く行動(どうした)の主体も1例を除いてすべて「私」の行動と予想している。主体が明示されていないにも関わらず、これほどまでに一致してくるという事実に対し、さらにその条件やプロセスをさらに追求する必要があるだろう。

3. 1. 2 対比

[9] 母が料理した魚は食べるが、

[9]において提示したような前件の文をどのように捉えるかに関しても、日本人と外国人学習者の間に大きな差が見られた。何を「対比」と考えるかについてははっきりした定義があるわけではないが、ここでは狭い意味で、前件と後件の比重が同程度の場合を対比と考えることにし、前件

が回答者が提示した後件より軽い場合は「前置き」と考えることにする。

	対比	前置き 後文が否定	前置き 後文が肯定
日本人	98%	2%	0%
外国人学習者	42%	45%	13%

日本人の場合は対比として捉えた割合は98%に上る。この文は、対比として捉えられるか否かが適切さの基準となろう。ちなみに日本人で逆接の前置きとした回答は、次の1例であった。

(13) ……実はあまり好きではない。

外国人学習者は対比として捉えたと考えられる文と「……おいしくない」「……好きじゃない」などの逆接の前置きとして捉えられる文がほぼ同数であった。

(14) ……おいしいですよ。

(15) ……野菜サラダも食べたいです。

(14)(15)のように、後文に肯定がくるものは、外国人学習者にのみ見られたが、誤用と言えるぐらい落ち着きの悪い文になっている。

さらに対比として捉えた回答が、どの部分と対比させているかについて詳しくみると、日本人の場合は、以下の3通りに分かれた。

A 「母」に対比させた回答（対比のうちの23%）

祖母が料理した魚は苦手だ

自分の料理した魚はまずくてたべられない

B 「母が料理した」に対比させた回答（対比のうちの41%）

スーパーで売っているのは食べません

冷凍食品のは食べない

生の魚はたべない

C 対象を具体的に明示しない回答（対比のうちの36%）

それ以外の魚の料理は食べられない

それ以外の魚はあまり好きではない

他のは食べない

外国人学習者の場合は、Aが44%、Bが31%、Cが6%であり、Cが目立って少なかった。課題作成時の予想では、日本人の場合Aが圧倒的に多いのではないかと考えていたが、B、Cのほうが多い結果となったのは意外であった。これは「母が料理する」ことは取り立てて新鮮な情報ではないためであろうか。「父が料理した……」とすれば、対比の意識が強く変わって来るとも考えられる。また、外国人学習者の場合、一応、対比として捉えていても、「肉は食べられない」「シーフードは

あまり好きじゃない「野菜を食べません」のように不適切なものを対比させている回答も見られた。したがって、この課題においては対比の A. B. C. 以外のものも適切性が低いと考えられる。

3. 2 文化や行動パターンに影響される連想、発想

日本人の回答の中には、文化や行動パターンの影響が強いと思われる回答も見られた。

「手紙がこない」→「心配する」

「京都へ行く」→「おみやげを買ってくる」

「病気が治るように」→「祈る」

などが一致度の高い連想例として挙げられよう。そのうちの一つを取り上げる。

[7] 病気が早くなおるように・・・

[7] では、日本人の場合は「祈る」、「祈願する」という連想がもっとも多く、半数近くにまでなっているが、外国人学習者の場合は9%と少ない。一方で、医者や薬に頼ったり、休むことに結び付けている割合が多い。日本人の場合は実際に祈る場合もあるのだろうが、典型的な言い回しとして定着している部分もあると思われる。この例のように、文化や日本人の生活に根ざした発想まで適切さに求めるのは、理解のレベルでは良いだろうが、産出のレベルでは難しいのではなかろうか。

	祈る	栄養・食べる	医者・薬	休む	その他
日本人	47%	24%	13%	7%	9%
外国人学習者	9%	14%	45%	26%	7%

[8] 大学で勉強するには・・・

大学で勉強するためには「何かが必要だ」とする回答が、日本人の場合は88%をしめた。必要なものは、お金、入学試験に合格すること、学力、強い意志、目的意識など様々であるが、述語は「必要だ」「(お金が) かかる」「～なければならない」「(お金が) いる」など、「必要」を表す語に収束されている。それに対して外国人学習者の場合は「必要だ」の類は29%と少なく、他に (16)～(21) のようにちらばりが見られた。

(16) ……自分の目標をしっかりと持つことが大切です。

(17) ……健康が大切だ

(18) ……まだ日本語が下手ですね。

(19) ……図書館より良いところはない。

(20) 寮に住むのが一番いい。

(21) 大変ですね。

	必要	その他
日本人	88%	12%
外国人学習者	29%	71%

適切さの面からは、(16) から (21) は不十分であり、やはり「必要」という類の言葉まで求めたいところである。

3. 3 教育的な面から

上記で見てきた外国人学習者と日本人とのズレは、当然、教育と結び付けて考えていかなければならないが、ここでは明らかに教育の影響を受けているために起こったと考えられる問題について扱うことにする。

[5] けさの新聞によると

	らしい	そうだ(伝聞)	そうだ(様態)	ようだ	その他
日本人	54%	31%	2%	4%	8%
外国人学習者	0%	50%	0%	0%	50%

日本語の教科書では、「～によると . . . そうだ」という文型をワンパターンで教えているものが多い。しかし、日本人で最も多かったのは「～によると . . . らしい」であり半数以上の回答にみられたが、外国人学習者の中には一人もその「らしい」は出現せず、「そうだ」に集中していた。この回答者のレベルでは、「らしい」を習得している学習者は多いと考えられるが、もっとも日本人に多い自然な反応が出てこないのは教育上に問題があるのであろう。初級では、あまり広がりを持たせて提出できず、 $p \rightarrow q$ のように固定したものとして教えることが多くなることはやむをえないが、それをどのように広がりを持たせていくかが中級以降の課題である。

(22) じき梅雨入りだ。(日本人)

(23) きょうの天気は晴れです。(日本人)

(22)(23) のように、地の文のまま終らせる回答が日本人の中に 2 例見られたため、外国人学習者の場合も「その他」の項目中に入れたが、不自然さは残る。

(24) きょう地震がありました。(外国人学習者)

(25) ロシアの大統領が帰国しました。(外国人学習者)

[2] 田中さんが来たら・・・

この初級レベルの文では、外国人学習者の回答は内容的には適切であると考えられるものがほとんどであった。しかし、日本人の場合は文末の形が依頼（「～てください」など）か意志（意向形、「～ましょう」など）であるのが、94%を占めていたが、外国人学習者はそれが58%に留まり、23%は、「・・・行きます」のように「～ます」で終わらせている形を使っていた。これは日本人の場合には見られなかったものである。

(26) ……一緒に東京へ行きます。(外国人学習者)

(27) ……会議が始まります。(外国人学習者)

日本人の場合は、その文を発話する場面が見えてくるような生きた文になっているが、外国人学習者の文の中には、(26)(27)のように、学習した例文をそのまま出しているという面があるように思われる。場面や文脈を無視し、伝達を目的としないドリルや例文を与えたことに起因するであろう。このような不自然さを産出させる教育には反省すべき点が多い。

4. まとめ

以上、課題文の中からいくつかを取り出し、適切さを軸に日本人と外国人学習者の回答を検討してきた。今後に残された課題は次のようなものである。

日本人の回答はなぜこれほど収束するのか、他にも可能性が多くあるにも関わらず、これだけ一致させる原因は何かといった点を解明することにはまだまだ多くの研究が必要となろう。形態素や統語の規制以外にも、語彙的な要素、文化習慣的な言語の背景の要素などがさまざまに絡み合っていて表れてくるのである。方法としては、今回行ったような調査を少しずつ条件を変えながら行い、その差異を調べる研究の積み重ねが必要であろう。

また、このような条件をつけずに、現実で使用されているものから、その使用状況とともに、使用頻度の調査も意味のある示唆を与えてくれるはずである。江田(1994)は、「ば」の用法に関して、主に小説からとった用例322例を分類し、その頻度を調べた結果から、初級、中級教育に対する提言を行っているが、このような方向からの研究も大切である。

同時に、外国人学習者の間違いではないが不自然な表現がなぜ表れてくるのかといった点に関する研究も進めていく必要がある。

適切性については、さらに課題を吟味し、適切性診断ができるような方向をめざしている。

注

- 1) 留学生センターで行っているプレースメントテストの一部として実施した。問題作成に当たっては、市川保子、梅田千砂子、フォード丹羽順子、外山美加、各氏と共同で行った。
- 2) 今回、日本人のデータとしてとったものは、年齢、社会的、地理などの側面から考えると抽出

範囲が極めて限られており、日本人を代表しているとは言いがたい。だが、対象としている留学生とは年齢、社会的な面では対応しているということでのメリットもある。今後は、一般的な日本人の反応の収集も行う必要があるだろう。

参考文献

1. 市川保子（1993）「外国人学習者の予測能力と文法的知識」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第8号 筑波大学留学生センター
2. 宇田川令子他（1994）「視点からみる日本語学習者の不自然な表現」『日本語教育方法研究会誌』Vol1. 3
3. 江田すみれ（1994）「複合辞による条件表現」『日本語教育』83号
4. 小篠敏明編（1987）『英語の誤答分析』大修館書店
5. 澤田治美（1993）『視点と主観性』ひつじ書房
6. 寺村秀夫（1987）「聞き取りにおける予測能力と文法的知識」『日本語学』第6巻 第3号
明治書院
7. 寺村秀夫（1993）『寺村秀夫論文集Ⅱ』くろしお出版